

題知らず

——仁平元年（一一五二）六月十六日、あわわノ辻

まさか、全滅したのか……。

すでに鶴めえは、闇よりも濃い黒雲に身を包み、夜空のいずこかへと去っていた。

山の端はへお落ちそうな望月もちつきが、地獄と化した平安京の辻を、残酷なまでに照らし出している。

「頼政よりまさ！ 広賢ひろかた！ 生きとつたら、返事せい」

藤原家成ふじわらのいえなりは、血の池に転がる人間たちを凝視した。

誰ひとり、ぴくりとも動かない。

蒸し暑さも忘れた家成の全身を、悪寒がザザッと駆け抜ける。

激烈な死闘の果て、凄惨な戦場には、うめき声ひとつ聞こえなかった。

代わりに、喰くい散らかされた臟腑ぞうふの異臭が家成の鼻を襲う。

（負けてしもうた。もう、何もかも、終わりじゃ……）

家成がふらつきながら足を踏み出すと、浅沓あさぐつの下でニユルリと嫌な感触がした。

ヒツと、悲鳴を上げて、あとずさる。

（鶴の喰い残した腸はらわたが、かような所まで……）

またしても人間は、鶴に敗れた。

万夫不当ばんぶふとうの豪傑と異端の天才陰陽師おんみょうじを以てしても、勝てなかった。

これから都は、この世はどうなってゆくのだ？

家成は、東山ひがしやまの空に明るみを感じた。

深更ていに起こった惨劇など素知らぬ体で、都みやこに旭日あさひが昇ろうとしている。

——八カ月前。

第一矢 埋もれ木

——久安六年（二一五〇）十月十六日、猪熊小路・檢非違使庁

1

青い満月が西山に沈んでも、都の長い夜はまだ明けていない。

強面の瘦せた老僕の案内で、安倍広賢は小路の裏戸口から檢非違使庁へ入った。

ひと際高い立烏帽子に、小柄で小太りの公卿がいる。暗がりでも、正二位中納言、藤原家成の

二重あごまで見えた。

「遅いぞ、博士。例の虎鶯の化鳥がまた出おったんじや。場所はほれ、内裏の裏鬼門、あわわ

ノ辻よ。何しろ酷い骸でのう」

ふだんと異なり、キンキン響くはずの甲高い声は心持ちひそめられている。

神泉苑の近く、百鬼夜行で有名な因縁の場所は、都人が恐怖のあまり「あわわ」と泡を吹く

ので、そう呼ばれた。

「身どもは明け方に床に就き、昼下がりに起き申す。中納言様もご存じのはずですがな」

これ見よがしにあくびを噛み殺しながら、広賢は格上の公卿に文句をぶつけた。

「そちなんど、大内裏の隅で飼ひ殺されとるだけじゃろが」

その通りだ。広賢は出世の道を外れて久しい。

星の動きを読み、天文密奏を行う天文博士は、本来なら陰陽寮の頭職だが、実際には仕事を干

されていた。宮中では図書頭ずしよのかみとして図書寮ずしよりょうの閑職へ追いやられ、膨大な古い蔵書に囲まれながら過こごしてきた。もともと、一陰陽師じゆいひのじやうが今の従四位上ためしより上がった例はないし、重い仕事がないぶん、気は楽だ。

「ちなみに先月、磨まろは左衛門督さえもんのかみに任せられたがの」

「それはそれは」

家成みかぢは帝びふくもんいんの生母美福門院いとこの従兄とばいんであり、鳥羽院とばいんの信任厚く、今を時めく院近臣いんのきんしんの筆頭である。全国で多くの荘園しやうえんを集めて羽振りを利かせ、他の公卿から反感を買うほどの贅沢ぜいさくぶりで、わが

世の春おうかを謳歌おうかしていた。

「鳥辺野とりべのへ骸ひとなつを放る前に、そちに見せたいと思うてな」

家成は白い顔に人懐ひとなつこい笑みを浮かべると、広賢の背へ馴れ馴れしく手を回してきた。

ガリガリの老僕が先に立つ。

家成に長年仕える家人は、そのいかつい風貌が百鬼夜行ももぢやぎやぎやうに登場する僧形そうぎやうの鬼がごせ（元興寺）にそっくりだそうで、主からそう呼ばれていた。

高燈台たかとうだいが照らす庁舎の薄暗い廊下を行くうち、広賢は早くも死臭を感じた。

平安の貴族たちは触穢しよくえを極端に恐れる。

中でも、血による穢けがれは深刻とされ、女性の月ノ物まで忌み嫌われたが、死は穢けがれの最たるものだ。ゆえに死者が出ると、罪人上ほうめんがりの放免ほうめんや貧困あえに喘きよめぐ清目に万事を任せて、自らは近づかない。にもかかわらず、上流貴族の家成がわざわざ検非違使けんひゐし庁へ足を運んだのは、何か魂胆こんたんがあるに違いなかった。

「そちは陰陽師のくせに怪異を疑つとるが、こたびばかりは認めざるを得まい。この平安京に、正真正銘の異形いぎようが現れたことをな」

深夜の京を跳梁跋扈する魑魅魍魎ちみもうりょうに、都人は長らく怯おびえてきた。

だが、百のうち九十九の怪異は人間の不安、悪意や憎悪が生み出した妄想にすぎない。怪異に対する恐怖や迷信を悪用する連中が、京を魔都まどに仕立て上げているだけの話だ。実際、依頼を受けて調べても、広賢は鬼一匹、火ノ玉ひとつ出くわした経験がなかった。むしろ、誤解や虚偽を見抜き、怪異のからくりを幾つも解き明かしてきた。

若き日の、あの悪夢の一件を除いて、だが――。

元興寺が突き当たりの部屋の遣戸やりどを開いた。

胸の上に微かな震えを感じ、広賢は首飾りへ指先をやった。兄が残した二つの神宝かんだからが強い邪気に反応している。

「奴が現れるのは、決まって望月の夜、それも丑うしノ刻（午前二時頃）じゃ。退治して名を挙げんと、少なからぬ者どもが、昨夜もあわわノ辻で待ち構えておった。他の連中は逃げたが、関東から上ってきた腕自慢の野武士のぶし二人と陰陽師気取りの坊主たたくが戦うたそう。これが、その者たちのなれの果てよ」

板間いたのまに安置されている一人目の遺骸を、元興寺が紙燭しそくで照らし出す。

「博士。異形の仕業しわざでなくば、この野武士は、いかなる得物えもので頭を砕かれたんじゃ？」

頭骨は半分潰れ、残った片目から目玉が飛び出している。肉が剥はげて露わになった頬骨が、やけに白く見えた。

「……りよりよく 膂力のある者がかなざいぼう金砕棒なりを力の限り振り下ろせば、かような骸となりましような」

「ふん。こいつは序の口よ。二人目はいかがじゃな？」

肥えてむっちりとした手が、隣の骸を示す。

左肩から右の脇腹にかけて、骨も肉も抉り取られたような深い切り傷が四本、並行して走っていた。心臓を裂いた傷で死んだらしい。

「面白いじやろう？ 見よ。こやつは嬉しそうに笑っておるぞ」

めんよう面妖にも、目と口元に驚きと喜びが入り混じったような表情のまま、硬直している。

謎を解き明かせぬ人間の不明をわら嗤っているようにさえ見えた。

(絶命の瞬間に、笑みを浮かべていたというのか……)

家成は沈黙する広賢を、最後の骸のそばへ誘う。

「極めつきは、三人目の坊主よ」

家成が「ほれ」と指差した骸は、毒々しい紫に変色した顔が恐怖と苦痛に歪み、死相を浮かべていた。僧衣の胸元ははだけ、同じ紫の肌が見える。

広賢は強い吐き気を覚えて、口へ手をやった。

「膂は一人目で吐いたがの。じゃが、気になるのはむしろ体のほうよ。四本傷の野武士は斬られただけじゃが、他の二人を見るがよい」

ころりとした指が示す先を、元興寺がしそく紙燭で照らし出してゆく。

広賢は覚えずうめ呻いた。

頭を砕かれた野武士の遺体をあつた検めると、ごぞうろつぷ五臓六腑がきれいに失われていた。坊主もだ。

「あわわノ辻のどこにも、中身は転がつとらなんだ。人間がここまでやるかの？」

たとえば巨象は人を踏み潰し、猛虎は人を喰らうと聞く。まだ名も知らぬ恐るべき獣が異国から持ち込まれたのか。いや、広賢は昔、臓腑を失った人間の骸を見たことがある。

(もしや、サムハラと関わりがあるのか……)

「化鳥の姿を見た者は？」

家成は小さくかぶりを振る。

「誰もおらん。満月じゃのに、黒雲のせいで辺りが真っ暗闇になるからの」

野次馬たちによると、昨夜も東三条ノ森に黒い霧が立ち込めた。それはやがて一叢の雲とな

り、平安京の北にまします禁裏きんりへ向かって、黒い虹の橋を空に架ける。そして、黒雲の中からヒョーヒョーと、虎鶯とらつぐみに似た鳴き声が聞こえてくるのだ。

「怖いもの見たさで集まったとて、誰しも命が大事よ」

頭上の黒雲から辻まで漆黒の帳とほりが下りる段になって、ほとんどの者が逃げ出す。

黒雲が消えた後には、月影の下、骸が転がっているわけだ。

「先だって、磨が化鳥に名を付けてやった。瞬く間に人口に膾炙かいしやしておるぞ。夜の鳥と書いて、
鵲ぬえじゃ」

会心の命名らしく、家成は得意げに胸を張った。

「そろそろ部屋を出ますかな」

立烏帽子から指貫さしぬきまで、全身に死臭が染みついているだろう。

「元興寺、外で見張っておれ」

骸の部屋を出て隣室に入り、向かい合つて座つた。

揺れる蠟燭ろうそくの明かりに、家成の顔が浮かび上がる。こんな時でも、眉毛を抜いてぼかした眉化粧で、しっかりと白粉おしろいに紅べにも差し、鉄漿かねで齒を黒く染めてあつた。

「五月に初めて現れて以来、これで三度目じゃ。検非違使は秘しておるが、実はこれまでも人間が喰われておつた。鶴は都を大きく揺るがすぞ。あの酒吞童子しゅてんどうじ以来、百五十年ぶりの怪異と云うてよい」

興奮する家成は、むしろ面白がつている様子だった。

「身どもに、その鶴を退治せよと？」

「否、逆よ。鶴を暴れさせて、悪左府あくさふの力を削ぐそ」

即答した家成は、にやりと笑う。

「いかに京が魔都じゃとて、いつまでも鶴をのさばらせてはおけまい」

京の治安を守るのはまず検非違使であり、今は「悪左府」こと、左大臣藤原頼長よりながの下にある。

頼長は苛烈な公卿で、先月、藤原摂関家の氏長者の座を兄から力づくで奪い取り、政の頂点まつりごとに

立つた。宮中でまさしく最上位の貴族、「一上」だが、かねて家成とは犬猿の仲の政敵である。

「源為義みなもとのためよしも、ちと目障りめざわになつてきおつたでな」

検非違使を務める河内源氏の棟梁とうりやうは、頼長の腹心として政局の一端を担ってきた。

「されど、院の思し召しは？」

これまで鳥羽院は頼長を取り立ててきたはずだ。大きく方針を変えるのか。

広賢の問いに、家成は眉根を寄せ、露骨に不機嫌そうな顔をした。

「そちが政を云々するには及ばぬ」

政は三位以上の「公卿」たち約二十名が執り行う。四位以下の中下級貴族は、広賢にとっての家成のごとく、有力公卿が作る派閥に属し、その庇護の下で世を渡るのが常だ。ゆえに、政争に振り回される。

「ともかく相手は異形ゆえ、陰陽師の出番よ。泰親に鵠を退治できると思うか？」

かの安倍晴明から数えて五代目、本家嫡流の泰親は「指御子」と称えられている。占いを極め、掌を指すように未来を言い当てるから付いた異名だ。世評では、晴明にも比肩しうる当代最高の陰陽師とされていた。

「まだ相手を知りませぬゆえ、何とも。されど、あの気障な男に無理なら、表の陰陽道では何もできませんまい」

「泰親とは知らぬ仲でもないが、敵方における以上、磨とて手加減はせん。安倍本家の失敗は、そちにとつても好都合なはず。手助けなぞすまいな？」

琵琶好きの家成は、笙を嗜む泰親とかねて雅楽を通じて交流があったが、こと政争となれば、話は別だ。

「あの男が、身どもに助けを求める道理がござらぬ」

安倍家は三流派に分かれ、長らく対立してきた。三家に融和が兆した時期もあったが、ある事件を契機に訣別した。泰親とは幼き日こそ同族の友垣だったが、残った因縁の傷痕も浅くはない。

「そちの術で、泰親の邪魔ができぬか？」

験力こそ互角でも、二人の術は昼と夜ほどに違う。

「はて。気は進みませぬが」

広賢が^{じゅうめん}洗面を作ると、家成が丸顔を寄せてきた。

「鶴は謎だらけよ。実は麿も、怪異など半分しか信じとらん。こたびの鶴騒ぎにしても、あの骸を見るまでは^{せつしやう}摂政の差し金にあらずやと、^{うたご}疑うとつたくらいじゃ」

悪左府の実兄で摂政を務める藤原忠通は、^{ただみち}父弟と激しく対立しながら、鳥羽院を巻き込んで三つ巴の^{さんせい}政争を繰り広げてきた。その修羅場で切り結ぶ張本人が、この家成だ。

「異形か否か、麿はいずれでもよい。鶴を上手く利用するだけよ」

家成は低いだんご鼻の穴を大きく広げた。

「されば、博士。鶴の謎を暴け」

「まずは黒雲から調べねばなりませんまい」

「任せたぞ、天才」

頭を下げた辞し、検非違使庁の裏門を出ると、すでに夜が明けつつあった。

かむろ頭の少女の姿がある。

由良は、^{ゆら}十数年前にあわわノ辻で拾った子だ。哀れに思つて屋敷で育てるうち、利発さを気に入り、女子ながら弟子にした。今ではすこぶる役に立つ助手になった。

「先生。竜が出た、鬼が出たと、都中が大騒ぎですよ」

^{ちまた}巷に流れる噂の大半は不確かで大げさで、間違っている。根も葉もない誹謗中傷で没落し、あるいは命を落とす者までいた。

「お前の言っていた化鳥がまた現れたそうさ。骸を見たが、確かに^ふ腑に落ちぬ」

異形はいる。だが、世で騒がれるほとんどは偽物だ。今回はどうか。

「今回はお調べになる値打ちがあるって、申し上げていたでしょう？」

由良に市井しせいの噂を仕入れさせ、気になれば真偽を確かめてきたが、広賢は夏前つるがから敦賀、豊岡とよおか、吉野よしのなど遠方の神社で調べ物があったせいで、鶴騒動にはまだ手を出していなかった。

東山からやつと顔を出した太陽が、由良の端正な丸顔を照らし出す。

「手伝え、由良。京を騒がす怪異のからくりを解く」

眩まぶしい朝光に目を細めながら、二人は人通りのでき始めた近衛大路このえおおじへ向かった。

2

小春日和の温もりを味わいながら、源頼政は鴨川かもがわに架かる小橋をゆらりと渡り始めた。

比叡ひえいの山はすっかり色づいて、目に心地よい。

東山の手前に、法勝寺ほっしょうじの赤い巨塔が聳そびえている。

(わしは、幸せ者もんじゃわい)

未明に起き、庭で武芸の鍛錬に汗を流す。心地よい早朝、足の向くに任せて京の町をそぞろ歩き、気の赴くまま歌を詠む。屋敷に帰れば、子らや家人が笑顔で待っていてくれる。

(昨日の月は、綺麗じゃったな……)

風情のある青い望月を見上げて、ふと琵琶湖びわこで見た月を思い出し、よい歌を詠もうとしたのに、調子に乗って安酒を過ぎたせいで、できなかつた。

漕ぎ出でて 月はながめむ さぎなみや 志賀津の浦は 山の端ちかし

(うむ、これでよさそうじゃな)

思案するうち、亡父から受け継いだ屋敷が見えてきて、頼政は現世に引き戻された。

築地塀の修理は待ったなしなのに、今年も無理だろう。同じ京武者の中でも、台頭する伊勢平氏や河内源氏と比べ、摂津源氏は凋落する一方で、父祖に合わせる顔がなかった。

「ちちうえ！」

門前には、起き出した幼子たちが頼政を待ち構えていた。子犬も嬉しそうに吠えている。

「おう、みんな。賢うしとったか？ どれ」

広い両肩に一人ずつ乗せてやり、左右の手で小さな手を握る。子犬も足にまとわりついた。

「おながが空きました、ちちうえ」

「さようか。庭に生つとる、とっておきの甘柿をいよいよ食うかのう」

ガハハと頼政が笑うと、子らがはしゃいだ。

「殿、昨夜また鶴が出ましたぞ」

少し傾いた上土門をくぐると、筋骨たくましい武者がいた。

井野隼太は二十代半ばながら、最も頼りにしている郎党だ。

「まことか。恐ろしいのう……」

「情けなや。さような有様では、頼光公が嘆かれますぞ」

四代前の源頼光は、酒呑童子や土蜘蛛を退治した有名な豪傑だ。でも、得体の知れぬ異形たちと戦って、内心は怖かったのではないか。

「辻斬りも盗賊も怖くはないが、異形は別じゃ。どうやって戦えばよいか、見当も付かん。早う誰か退治してくれんかのう」

呆れ顔の隼太をしり目に、頼政は皆で一緒に短い廊下を渡り、小ぶりの寝殿に入った。

父の仲政は従四位下まで上り詰め、検非違使や左衛門尉を務めたが、摂津源氏は世渡りの下手くそな頼政の代で没落した。武芸百般に通じていても鳴かず飛ばずだから、頼政が武家の棟梁だと知らぬ者までいる。歌才のおかげで公卿たちの歌合せに呼ばれ、誰その屋敷や道中の警固、強訴の禁圧やら、匪賊の討伐などの力仕事をもらいながら、どうにか食いつないできた。

「殿、大事なお話がございます」

後ろにびたりとついてくる忠臣の強い語気に、頼政は振り返ってうなずいた。

「父は隼太と話があるでな。先にみんなで柿を採ってくれい」

ワアツと子らが歓声を上げ、子犬の駆け出す庭へ下りてゆく。

頼政は壁のあちこちに霊符を貼った部屋に入ると、腰から業物を外した。

刃長二尺七寸（約八十二センチメートル）の金拵え付きの太刀は、昔の恋人の実家からもらった逸物で、亡き想い女の名に因み「深山木」と名付けた。

「摂津源氏を再興するためには、鶴退治よりほかございませぬ」

板間に敷いた布縁の薄い莫蓆のうえで、隼太と対座した。

隼太はしばしば家中を代表して頼政を口うるさく説教するのだが、井野家は何代も前から仕えてくれる家臣であり、言い分ももつともなので、致し方ない。

「のう、隼太。お前は異形を自分の目で見たことがないじゃろう？」

「ございませぬ」

「わしは若い頃に二度ある。わけあって詳しくは話せぬが、世にもおぞましき姿であった」

一度目は顔が猿、体が犬の小さな異形で、焼ける前の陰陽寮の地下で遭った。二度目は黒い霧をまとう禍々しい狼で、後宮こうきゆうに現れた。先祖が派手に退治をしたせいで、子孫が異形に魅入られているのかも知れない。

「異形よりも恐ろしきは、わが源氏の行く末にごさる。当家は年がら年中、火の車。一族郎党の身にもなつてくださりませ」

頼政は「散位源藏人大夫さんい ぐんざうのたいふ」と名乗っているが、要するに〈従五位下〉という位階だけあって、官職を持たない地下人じげにんだ。三十三歳でようやく蔵人に補ふされたのも束の間、厄介な異形絡みの事件に巻き込まれ、わずか二カ月で辞した。以来、かれこれ十五年近く官職にありつけていない。一族郎党は皆、それぞれ見つけた生業なりわいに忙しいため、付き人は隼太だけだ。

「そういえば、散歩の途中で人に会あうてな。また明日からしばらく仕事をもらうたぞ。蔵人の一人が、屋敷で牛を死なせてしもうたそうな」

家畜の死穢しえに遭あうと、禁裏きんりへの参内さんだいが五日間禁じられる。

蔵人の定員は六名で、物忌みのためによく欠けるから、たまに頼政が代わりを務め、布や米などをもらう。蔵人所くらんとしんの仕事は多岐にわたるが、知る人ぞ知る武勇を買われ、しばしば禁裏の警固も担ってきた。

「来月には、別の蔵人に初孫が生まれて、忌中きちゆうに入るとも聞いた」

出産も穢れであり、七日間の物忌みだ。

「これで、年を越せそうじゃろ？ わしはついとるのう」

明るく続けても、隼太はかえって細い眉を吊り上げた。

「当代一の豪傑が雇われ警固など、恥ずかしいとは思われませぬのか」

「昔の縁もあるでな。わしは蔵人所から頼りにされとるんじゃぞ」

終わりまで聞かずに、隼太が手を振る。

「面倒な仕事を、ていよく殿に押し付けておるだけでござる。昨夜の騒ぎで、蔵人たちも鶴が本当におると知ったはず。これからは、鶴絡みの凶事の責めを免れようと、蔵人からの頼み事が増えましよう」

禁裏には帝みかどが住まわれ、貴族たちが使う幾十の建物、無数の門や入口がある。どこからの侵入も許してはならないが、鶴は空を飛ぶらしいから、弓上手の頼政が重宝されよう。

「そろそろ身内が死んだなどと偽って、役目から逃れる蔵人も出て参りましような」

身内みまかが身罷しゆかしった場合、三十日間も出仕できなくなる。

「されど、誰ぞが鶴を退治すれば、代わり仕事はいっぺんに来なくなりますぞ」

「むう。わしのごとき不甲斐ない貧乏武士に仕えてしもうたばかりに、お主らにはつくづく申し訳ないと思うておる」

頼政は隼太に。ぺこりと頭を下げた。

「おやめくだされ。皆、好き好んで殿にお仕えしておりますれば、お詫びなぞご無用。われらはただ、主が世から正しく認められる日を夢見ており申す」

頼政は抜群の武勇を天下に示す好機に恵まれぬまま、五十の声を聞こうとしていた。隼太ら家中の者には、それが残念でならぬらしい。

「地藏様にも、お願いはしとるんじやが」

頼政は庭の正面を見やった。

子らが群がるにぎやかな柿の老木の下に、亡き嫡妻と大事にしていたひと抱えの石地藏が佇んでいる。頼政はこれまで三人の妻を娶り、深く愛したが、いずれにも先立たれた。討ち果たされた異形の祟りだと断言する陰陽師もいるから、異形にはもう関わりたくなかった。遺された宝物の子らを守りたかった。

「神仏頼みより、あの弓矢をご覧なされ」

隼太の示す先に、摂津源氏の家宝が祀られている。

頼光が夢の中で授かり、子孫に伝えた五人張りの強弓〈雷上動〉と、二本の鎗矢〈水破〉と〈兵破〉だ。水破は黒鷲、兵破は山鳥の羽根ではいだ矢で、破邪の力を持つという。頼政の出世

と家の加護を願い、家人たちも手入れを欠かさなかった。

「偉いご先祖様がおわすおかげで、肩身が狭いわい」

笑つてごまかそうとしても、隼太の表情は硬いままだ。繰り返し異形退治を進言してきたが、今日は一歩も引かぬという気迫を感じた。

「今の検非違使は為義殿じゃ。手柄を横取りするのも、気が進まんでな」

身内同士でもいがみ合い、野心を剥き出しにする為義とは、昔から肌が合わなかった。むしろ歌合せに呼んだり、盗賊討伐の仕事してくれる平忠盛たいらのただもりのほうが、同じ派閥でもあり、ずっと仲がよい。

「この末世では喰うか、喰われるか。位階は同じでも、為義卿は左衛門大尉に任ぜられて、摂関家に食い入っておわします。遠慮会釈など、一切ご無用」

つい先月、かつて従一位太政大臣まで上り詰めた摂関家の実力者、藤原忠実改め法名円理たださね えんりが嫡男忠通ただみちを義絶し、氏長者の地位を剥奪して三男の頼長に授けた際、手足として使ったのも河内源氏だ。為義らは御倉町みくらまちに駐屯し、朱器・台盤など摂関家伝の重器を奪取し、東三条殿ひがしさんじょうどのを押収して頼長に献じた。家中に諍いを抱えつつも、為義は関東や鎮西ちんせいに子らを派遣し、勢力を広げてもいた。

「為義殿も気張つとるのう。歌なら、絶対に負けんのじゃがな」

ガハハと笑つたが、隼太は戯言あざわらひを受け流し、身を乗り出してきた。

「このままでは、源氏の嫡流が他の武家の風下に立たねばなりません」

河内源氏は八幡太郎義家はちまんたろうよしえという英雄を出し、世に名を轟かせた。他方、摂津源氏は頼光の鬼退治こそ有名だが、作り話だと腐す者もいた。今やすっかり落ちぶれて、清和源氏の嫡流が河内源氏だと勘違いする者までいる。

「伊勢平氏をご覧なされ」

平忠盛は正四位上で内蔵頭くらのかみと播磨守はりまのかみを兼ね、嫡男きよもりの清盛はすでに正四位下で安芸守あきのかみだ。昇殿まで許されており、源氏一門は完全に水を開けられていた。

武士たちは公卿の手足となって、出世のために熾烈なせめぎ合いに明け暮れているが、頼政に張り合う気はなかった。位階と官職は、あれば助かるが、なくても何とか暮らしてゆける。

「のう、隼太。出世よりも、今まで通り一族郎党が幸せで、和氣藹々わきあいあいと暮らしてゆければよいとは思わんか？」

「殿、このままでは借財で首が回らず、この屋敷も手放さねばなりません。先だって殿が拾われた犬の餌にも事欠く始末でござる」

「そうなんか……」

家来に任せきりで知らなかった。何とかなると根拠もなく思ってきたが、かなり切羽詰せっぱつまっているらしい。

「出世した武家は失敗を恐れて、当面は様子見のはず。すぐには鶴つるに手を出しますまい」

「じゃが、あの早良親王さわらしんのうの崇りと申すではないか」

四百年ほど前、謀叛の濡れ衣を着せられた若き親王は、実兄かんむていの桓武帝に潔白を訴え、絶食の末に飢死した。その後、帝の身内が次々と病没し、疫病や洪水などの凶事も連続したため、怒れる親王の崇りとされた。怨霊に恐怖した帝は長岡京を廃し、平安京へ都みやこを遷うつした。さらに「崇道天皇すどう」の尊号を贈って親王を追諡ついでするとともに、繰り返し鎮魂の儀を執り行った。それでも京の災

厄はやまず、貞観五年（八六三）には、親王の霊を奉斎して神社が建立された。神泉苑でも怨霊を鎮めるための御霊会ごりょうえが盛大に行われ、祇園会ぎおんえとして恒例になっている。

隼太がにじり寄ってきた。

「平安京最大の怨霊なればこそ、討つ値打ちがござる。中納言様に鶴退治を申し出られませ」

「あの御仁は、喰えぬお人じゃからのう……」

家成の白い顔と丸い眉、やけに長い立烏帽子が脳裏に浮かび、甲高い声がキンキン耳に蘇る。

かねて頼政は鳥羽院から歌才を愛され、院御所ちようきんぎようじうに出入りして、家成の目に留まった。以来、頼政を歌合せに呼び、仕事もくれる。幼帝が朝覲行幸のために生母の実家である家成の屋敷を訪

問なされた際も、頼政は警固の榮譽に浴したものだ。手元不如意てもとふによいの際にはしばしば融通を頼んできた。

「あのお方なら、うまくご自分の手柄になさりつつ、殿を引き立ててくれましょう。一族郎党のためでござる」

隼太は優れた武技を持ちながら、他家の引き抜きにも応じず、頼政に忠誠を尽くしてくれた。

屋敷に仕える家人たちも同じだ。嫡男なかつなの仲綱以下、長じた子らは気のいい若者たちで、摂津や西脇にしわきの莊園わきにあり、郎党とそその日暮らしの生活を送っていた。

「ちちうえ、どうぞお召し上がりくださりませ」

庭から戻った幼い娘が小さな手で採れたての柿をふたつ、持ってきてくれた。

「おお、美味そうじゃ。礼を言うぞ」

庭で子らが遊ぶ姿を見ると、頼政はいつも幸せな心地になった。大人は幼い子らを守るために生きている。子らのためにも、異形をのさばらせておくわけにはいかぬ。

摂津源氏も、源頼政も、埋もれ木だ。

埋もれてはいるが、決して枯れてはいない。

父を慕ってくれる子らのために、家中の皆のために、ひと花咲かせてみるか。

「これ以上、お前たちに苦勞をさせとうない。ここらで一丁、やるか」

頼政は腹をくくった。歌以外に、取柄は武勇だけだ。

「よう決意なさいました」

隼太が厳しい表情をようやく緩めた。

「やるからには、まずは相手を知らねばな」

「検非違使の連中が来る前にあわわノ辻で見ましたが、それはひどい骸で……」

微に入り細に入った語りに、頼政はうんうん頷いていたものの、ふと気づいて青くなった。

「待たんか、隼太。お前は死人のせいで、穢れとらんか？」

もしそうなら、同じ居室で対座した頼政も穢れたことになり、明日の出仕ができなくなる。

「某それがしは吹きっさらしの大通りで遠目に眺めただけ。穢れてはおりませぬ」

「その割には、詳しくう話しておったではないか。相手は異形に喰われた死人じゃぞ」

どの場合に穢れ、あるいは穢れていないのか、その見極めはしばしば難しい。

押し問答をしたが、ここは頼政も譲れなかった。

「某は別にどちらでも」

隼太が投げ出すように応じた。近ごろは触穢による禁忌が多すぎて、付き合い切れぬと開き直る者たちもいたが、頼政は大切な家来を守らねばならぬ。

「急ぎ、力のある陰陽師を呼ばねばな」

「当家にさような余裕はございませぬ」

「ほれ、変わった紙冠かみかぶりを被かぶつとる法師陰陽師がおったじゃろ？」

「その坊主が昨日、鶴に喰われたのでござる」

「……可哀そうにのう」

人はいとも簡単に死ぬ。疫病でも、火事でも、呪詛じゆそでも、怪異でも。

「実は一人、東市ひがしのいちで評判の唱聞師しょうもんじがおります。遠呂智おろちと申す者で、下手な官人陰陽師よりも

その道に詳しいとか」

呪いと祟りみやこびとが蔓延する世で、都人は占いや祓いをしてくれる陰陽師を必要とした。陰陽寮に

務める正式な陰陽師は数が限られ、公卿が私用にも使うから、値も張った。そこで、貧しい貴族

や庶民を相手に、僧侶くずれや怪しげな唱聞師しょうもんじがそれらしい真似をして褒美をもらうようになった。

唱聞師しょうもんじは卜占ぼくせんのほか、経読みくせまいや曲舞なりわいなどを生業とする芸人だ。

「腕は拔群なれど、身なりはボロボロ。つっけんどんで、気まぐれに法外な駄賃をふっかけてく

るとか。それでも、三跋羅さんぼらの再来だと囃す者もおり申す」

三十年ほど前、市井に現れた若き唱聞師三跋羅は奇跡を幾つも起こしたとされる。死んだ人間まで甦らせたとの噂だが、長らく行方知れずのままだった。

「遠呂智が鶴退治に力を貸してくれんかのう」

「住まいはどことも知れず、会うにも手順があるそうでごさる」

時折あわわノ辻に現れるかむろ頭の風変わりな少女に怪異について話し、面白そうだと関心を引けた場合だけ会わせてくれるという。

「お前はここで待っておれ」

穢れた本人からはうつるが、もらった人間がさらに他へ穢れをうつす心配はない。

頼政は愛刀をひっ掴むや、廂ノ間へ出た。

「みんなで仲良う分けるんじゃぞ！」

庭の子らにひと声かけ、廊下を渡りながら、頼政は橙色の柿にかぶりつく。

サクリと音がして、口の中にほどよい甘みが広がった。

3

昼下がりの日輪に照らされ、鴨川の流れは眩いばかりだ。

橋の半ばで立ち止まると、広賢は両手を開いて、ほつれた袖口を由良に見せた。

「遠呂智らしくなっておるか？」

由良が笑うと、頬に小さなえくぼができた。

「お姿だけは。みすばらしいなりをなさっても、口ぶりも物腰もふだんと同じですけれど」

これから会う源頼政については、歌こそ上手だが、うだつの上がらぬ武士だという評判しか聞かなかつた。同じ派閥に属していても、頼政は無官だし、広賢は歌合せの類に関心がないから、顔を合わせる機会がなかった。たぶん初対面だ。

木橋を渡り終え、近衛通りも末まで来ると、おんぼろ屋敷が見えてきた。

「聞きしに勝る落ちぶれようだな」

壊れかけの築地塀は修復されなのまま、風雨に晒さらされていた。

この百年余、貴族の大半は、上も下も男も女も、政争と恋愛にうつつを抜かし、民を顧みることなく遊び呆けてきた。政を担う公卿たちは世襲で固定され、己の保身と栄達しか頭にない。租税は民の暮らしに重くのしかかり、世はますます貧しく、悪くなる一方だった。

上土門の柱には、新しい物忌札ものいみふだが立てかけられている。

穢れに触れると、陰陽師から買った霊符を門や軒に立てて屋敷に籠り、ほとぼりが冷めるのを待つ者が多い。

「頼政卿は信心深いお方で、怪異をひどく怖れておいででした」

昨日、頼政が鶴の穢れを祓い清めてほしいと、あわわノ辻で由良に頼み込んできた。その家来が鶴をよく調べていると言うので、引き受けたのである。

「カモにされて、このざまというわけか」

万よろずの迷信や誤解の中にも、一つの真実くらいはあるかも知れぬ。ゆえに広賢は、由良をあわわノ辻へやり、気になる怪異の話があれば、唱聞師として出向いて真偽を確かめてきた。今のところ、さしたる収穫もないのだが。

「先生、あまり毒舌が過ぎると、また喧嘩になりますよ」

ついこの間まで子供だったくせに、近ごろの由良はいっぱしの小言を並べるようになった。

もともと広賢は人付き合いが苦手な上に、長らく閑職にいるため、すでに独り立ちした子らのほか、弟子は由良だけだ。それでも食うには困らず、家人もいるから不便はしていない。

「ようお越しくだされた、遠呂智殿」おろち

門前で待っていた若者が隼太で、鶴退治により主家を再興せんと奮闘している郎党らしい。

「身どもで役に立てるかはわからぬが」

軽く応じて門をくぐると、屋敷からにぎやかな声が聞こえてきた。野太い声が女たちを笑わせている。

中へ通されるや、男がバタバタと渡り廊下を駆けてきた。

「待ちかねとつたぞ、遠呂智！」おろち

たかだか町の唱聞師が来ただけで、もう救われでもしたように、頼政が白い歯を見せてニコニコ笑っている。子らが周りに群がっており、広賢を物珍しそうに見上げていた。子犬までいる。

「お主は伝説の三跋羅さんぼらとまで呼ばれとるそうじゃな。頼りにいたすぞ」

剽悍な顔ひょうかんつきの虎髯とらひげの男はいかにも武者らしく、分厚い胸板、引き締まった首筋から肩へ盛り上がる肉づきで、筋骨隆々たる体軀たいくが見て取れた。武士とはほとんど縁がなかったが、広賢とは別の世界に住む人間らしい。

さっそく小さな寝殿の部屋へ通された。

板壁や屏風には霊符がぎっしりと貼られ、奥には家宝らしき弓矢が仰々しく飾られている。

「何しろ世を騒がせとる鶴の穢れよ。ひと筋縄ではいくまいと思うてな。取り急ぎ掻き集めてみたんじゃ」

広賢はいかにも安物と見ゆる使い古した円座わらうざに腰を下ろした。

廂ノ間に、隼太と由良が控える。

「よくもこれだけゴミを揃えたものだな。そこかしこにベタベタ貼りたくってある霊符もどきは、似非えせ陰陽師に掴まされた紛い物ばかりだ」

部屋を見渡しながら、広賢が遠慮なく言うと、頼政が太い眉をひそめた。

「評判のいい陰陽師に頼んで、借財までして褒美もはずんだんじゃぞ」

「覚えておいて損はない。身どもも含めて、陰陽師は嘘つきばかりだ」

「そうなんか？　じゃが、なぜ似非とわかる？」

「鎮宅ちんたくれいふ霊符は七十二個の言葉に応じて、描くべき星の位置と数、符号が一つひとつ違う。ここに貼ってあるものは、右の柱の三つを除いて、全部それらしく真似ただけの偽物だ。下手くそな字はともかく、使っている紙も墨もことごとく安物だな。付け加えれば、たとえ本物でも、たいてい一年ほどで験力は無くなるがね」

「むう。陰陽師たちが申すには、ご先祖様の鬼退治以来、異形に崇あがれとるそうだな」

頼政が青菜に塩の顔をしている。

「陰陽道は当たるも八卦はっけ、当たらぬも八卦。当たれば手柄として大いに喧伝し、外せば用意しておいた言い訳を使う。部屋に見苦しいガラクタを貼りたくって気が休まるなら、放っておけばいい。別に毒にも薬にもならんからな。身どもには目障りめざわりで、すこぶる鬱陶うつとらうしいがね」

コホンと、廂ノ間にいる由良が聞こえよがしの咳払いをした。

頼政は儼然ぶぜんとした顔つきだ。

「後で、皆に相談してみよう。ところで、今日来てもらうたのは、例の鶴の一件じゃ」

頼政は隼太にも語らせながら、身振り手振り経緯を熱心に語るが、広賢にとって別段新しい話
はなかった。

「教えてくれ、遠呂智^{おろち}。触穢に当たるじやるか。わしか隼太か、どっちが正しい？」

「いずれも正しく、いずれも間違いだ」

「なんじゃと？」

拍子抜けした顔が、広賢を見ている。

「陰陽道の歴史は古い。秦^{しん}より来たりし徐福^{じよふく}にまで遡る者もいるが、かの役小角^{えんのおづぬ}は前鬼^{ぜんき}と後鬼^{ごき}を
従えて、妖術を用いたという。吉備真備^{きびのまきび}が陰陽道を大成したのは四百年前だ。安倍晴明^{あべの}が薨^{こう}じて
からも、陰陽道は百五十年わたって受け継がれ、幾つもの流派と解釈を生んできた。ゆえに例え
ば手足の爪を切つていい日も、沐浴^{もくよく}が禁じられる日も、流派によっていちいち違う」

心当たりがあるらしく、頼政はうんうんとうなずいていた。

「戸外なら穢れはうつりにくいだが、相手が漆黒の雲をまとう謎の異形となれば、話は簡単でない。
つまり、ある流派から見れば、そなたは穢れており、別の流派から見れば穢れていないのだ。近
ごろは金神^{こんじん}などという凶神まで新しく造られた。安倍本家も迷信だと否定しているがね。穢れだ、
祟りだと恐れておったら、外へ一步も出られなくなるぞ」

頼政は哀れなほど困った顔つきになっている。

「わしらは結局、どうすりゃいいんじやろ？」

「道を極めた陰陽師でも、己が正しいと思い込んでいて、本当は何が正しいのか、もう誰にもわからぬ。されば、己が救われると思う解釈を選べばよい」

ううむと、頼政は腕を組んで考え込んだ。

本来、陰陽師は中務省なかつかさしやうの官吏だが、有力な貴族たちにはしばしば用いられた。夢見ゆめみが悪い、体調が優れぬ、怪異があつたなどと言つては、呼び出される。流派ごとに通り一遍の祓えや祭をし、靈符を渡すのだが、優れた陰陽師は自らが責めを負わぬよう、幾つもの逃げ道を周到に用意しておく。

例えば高熱で重そうな病なら、ひとまず眉をひそめて「これは難しい」と告げる。怨霊や呪詛に繋がりそうな出来事を聞き出すか、前もって調べておき、それらしい原因を決めて告げ、しかるべき儀式を執り行う。もともと死病でない場合も多いし、施した術の力を信じ込んで快癒する場合もある。治せばありがたがられ、死ねば見事に予言が当たるわけだ。

頼政はうんうん唸るが、何を信じるのか、最後は自分で決めるしかない。

「隼太とやら。鶴騒ぎで神隠しに遭った者を知らぬか？」

「聞きませぬな。何ぶん暗がりゆえ、しかとはわかりませぬが」

「他に何か気づいたことは？」

隼太はいったん口を開きかけてから、戸惑った様子で視線を落とした。

「何じゃ？ 言うてみい、隼太」

「野次馬が散った後、黒い天狗てんぐの面を被った男が、暗がりから現れるのを見ました」

「まことか！ なぜ今まで言わなんだ？」

頼政はまんまるの目を見開き、家来を凝視している。

「ひと騒がせな野次馬にすぎますまい。殿が退治に二の足を踏まれては、と……」

「いや、もしも鶴と天狗が手を組んだら、相当手強いぞ。遠呂智よ、鶴はあの早良親王の怨霊じゃるか」

「そなたのように、猫も杓子も呪いだ祟りだと怖がつてくれるから、陰陽師は荒稼ぎができて、笑いが止まらない。屋敷がボロボロになるわけだ」

広賢はカラカラ笑ったが、頼政は難しい顔だ。

「殿、遠呂智殿に肝心のお祓いのほうを」

場を取り繕うように、隼太が口を挟んできた。

「ともかく、屋敷の者たちが呪われては困る。何とかしてくれい」

広賢は懐から二枚の霊符を取り出し、スツと頼政の前にすべらせた。

「念のために作っておいた。大きなほうは見える場所に貼るがいい。小さなほうは帯持せよ」

頼政はおそろおそろ手にした霊符を見つめている。

「これで穢れを祓って、鶴の呪いを免れられるのか？」

「わからん。身どもなりに験力を込めはした。すべてはそなたが何を信ずるのだが、なぜ平安京に怨霊がかくも多いのか、考えたことはあるか？」

首を傾げる頼政の答えを待たず、広賢は続けた。

「かつて落雷、旱魃、水害、疫病、地震、飢饉、火事に至るまで、あらゆる厄災は失政が原因であり、為政者に対する天からの譴責だと考えられていた。だがそれでは、公卿たちが責めを負わ

されかねん。ゆえに、非業の死を遂げた者たちを引つ張り出し、神や怨霊の祟りだと喧伝して回るようになった。稼ぐにも好都合ゆえ、陰陽師たちも便乗した。かくて京の都は、怪異と異形だらけになったわけだ」

「じゃが実際、多くの者たちが異形に出くわしておるぞ」

頼政は流行りの今昔物語集を愛読していると言い、生霊や餓鬼、夜叉などの例を挙げてゆく。

ふんと、広賢は鼻を鳴らして遮った。

「あれほど多くの作り話を集めた書物も珍しいな。身どもは怪異の嘘を幾つも暴いてきた。人は何の変哲もないものでも、人面に見えるとか、誰かの呻きに聞こえるなどと言って騒ぎたがる生き物だ。数年前、燃える石の話を聞いて出かけたが、調べてみればただの炭であった。先だっては羅城門の近くに、異形により幼子を黄泉に連れて行かれたと嘆き悲しむ女が二人いた」

「おお、わしもさような女に会った覚えがあるぞ」

頼政が身を乗り出してくる。

「調べたところ、一人は異形でなく盗賊に攫われたと知れた。もう一人には最初から子などいなかった」

「どういう意味じゃな？」

「人生は孤独ゆえ、誰かに気にかけてほしいのだ。嘘を吐いておるうちに本当だと信じ込んだか、あるいは気が変になったか」

「ならば、丹波の森で狸に酔っ払わされて化かされた話はどうじゃな？ 近ごろよく聞くぞ」

「いちおう調べたが、あれはまし、酒だ」

木の洞や岩の窪みなどで、猿が集めた木の実などが自然に発酵して、酒になる場合がある。それを飲んだ樵きしりが酔っ払って眠ってしまい、夢を見ただけの話だった。

「似た話は幾らでもある。ある茸きのこを食べると、人は幻を見る。山中では樵が異形に襲われたとか、奇妙な世界へ行って戻ってきたなどと申すが、確かめれば、たいてい茸を食っている。白い小さな傘を作る茸でな。私も食したが、書物の異形に押し潰される幻を見た」

「なるほどのう。されば蝕しよくはどうじゃな？ わしは落ちておった釘を踏んで、大怪我をしてしまったことがある」

「それは、暗くて足元が見えにくかったただけであろう。蝕は不吉なりと、陰陽師が不安を煽あおるが、実は日輪も月も時々欠けているのだ。明るすぎて、気づきもしないがね」

「そうなんか」

「世の出来事は理非で説明しうる。できぬなら、まだ人の知が足りぬだけだ。怨霊だ、異形だと人は騒ぐが、実物を見た者はおらぬ。隼太とて、鶴の姿を見てはおるまい」

廂ノ間へ目をやると、若者は口を尖らせながら、黙ってうなづく。

「いや。わしは二度、異形に遭おうて、斬った」

頼政は視線を落とし、板目を見つめている。

「いつどこで、何を見たのだ？」

「詳しくは言えぬが、二度目はあの刀で異形を斬った」

頼政は刀掛けにある一振りの太刀を指差した。

「ふん。異形の話のほとんどは、聞くに堪えぬ嘘話だ。身どもが問い詰めれば、たいてい答えに行き詰まる。頼光の鬼退治も、ただのお伽話ときばなしにすぎん」

「何じゃと？ わしはともかく、ご先祖様を馬鹿にする気か！」

目を吊り上げる頼政を、広賢は平然と見返した。

「身どもは真実を語っているだけだ。この世に鬼がおるなら、会わせてみる」
にらみ合っていると、隼太がとりなすように間に入ってきた。

「殿、日も傾いて参りました」

「おお、そうじゃな」

頼政はまだこわばっている顔に、人の良さそうな笑みを載せた。

「無駄に長居した」

広賢が立ち上がると、頼政もゆらりと続いた。

「世話をかけた。礼をせねばな」

「絹を五十反たん（約百二十万円）、用意してくれ。明日、取りに来させる」

頼政主従が口をあんどぐり開けている。

「遠呂智殿おろち、当家の苦境に鑑み、いま少し何とかありませんか？」

「渡したのは、三跋羅の霊符だ」

「本物の三跋羅は人を甦よみがえらせたんじゃない？」

広賢は気分を害した。陰陽道の素人が三跋羅の何を知っているのだ？

「ただの作り話だ。人は決して甦よみがえりはせぬ」

「じゃが、地藏様のおかげで地獄から帰ってきた者もおるぞ。今昔物語に幾つも例はあるが、お主として神仏を否定はすまい」

頼政は小さな庭に立つちっぽけな石地藏を慈しむように眺めている。

「あの不格好な石くれには何の力もない。そなたが勝手に信じているだけだ」

「ええ加減にせい！」

頼政が顔を真っ赤にしながら、ぐわりと広賢の胸倉むなぐらを掴んだ。

「やめろ。陰陽師を敵に回すと恐ろしいぞ。殺せば崇られる。生かしておけば、呪い殺される」

呪詛を怖れて、貴族たちは陰陽師を表向きは丁重に扱う。政争の具に使う者も多いが、本当は呪詛で人を殺せはしない。

「身どもは、隼太が見た骸を検非違使庁の一室で長い間拝んでいた。そなたもこの家も、ずいぶん穢れたであろうな」

広賢は嗤いながら、付け足してやった。

「何じやと？ なぜそれを早く言わん！」

頼政の荒い鼻息が顔にかかった。

「触穢の大半は眉唾だ。穢れがあると申すなら、この場で見せてみよ」

「この似非陰陽師めが！」

屋敷が揺れるかと思うくらい、落雷のような大音声だいおんじょうだった。

「もしも鬼がいるなら、人間の中にこそいる。今のそなたの心が怨おんで満ちておるようにな」

「殿、お赦しください。かような無礼者の名を挙げた、某の過ちでござる」

隼太が二人の間へ割って入ると、頼政はようやく手を離した。

「絹を用意しておくゆえ、明日の夕方、取りに参れ。じゃが金輪際、こんりんざいお主には頼まん」
言い捨てた頼政は庭へ下りると、下駄を履いて石地藏のほうへ向かった。

「あれは亡き奥方の大切な形見でござる。お引き取りを」

隼太に案内されて、無言のまま渡り廊下を歩く。

門前まで来ると、隼太がぶつきらぼうに言葉を投げってきた。

「わが主は嘘を吐くような人間ではござらぬ。御免」

若武者が肩を怒らせて踵かかとを返した。子犬まで現れて、広賢に向かってうるさく吠えた。

通りへ出ると、すでに夕焼け色になっていた。

二人並んで、鴨川へ向かう。

「悪い方ではないように思いましたが」

「だから騙されるのだ。人間は愚かで、しばしば間違う。身どもとて同じだが」

おろち遠呂智という別の顔で動いてきたのは、行方知れずの兄を探すためだ。

この二十四年、得られた手掛かりは乏しいが、もしかしたら鶴こそは本物の異形かも知れぬ。

その鶴の謎を解けば、真実に辿りつけるのだろうか。

水面の橙色の煌めきに誘われて、広賢は小橋の中ほどで立ち止まり、古びた木の欄干らんかんに手を置いた。

「先生、本当に絹を五十反も受け取られるのですか？」

「まさかな。迷妄めいもうに囚とらわれている馬鹿に、灸せいを据たえてやっただけだ」

由良が小さく笑った。

「また喧嘩で終わってしまいましたね」

「つまりぬ人間に会っただけで、何の収穫もなかった」

「でも、部屋の奥にあった弓と矢には、とても強い験力を感じました」

由良は類まれな天性の靈感に恵まれていた。だから、助手として使っている。

「源頼光の矢、か」

まもなく、秋日が西山の向こうへ沈む。

川面から陽の煌めきが消えた時、本当に平安京の異形が蠢き始めるというのか。

広賢は東山へちらりと目をやった。

ほっしよっじ
法勝寺の高い赤塔が、暮れゆく京の町を見下ろしていた。

（つづく）